

フルエンシーとプロソディの相互関係：  
ポエトリー・リーディングでフルエンシーとプロソディを習得する

小泉 純一

日本福祉大学 全学教育センター

**Reciprocity between Fluency and Prosody:  
Acquiring Fluency and Prosody through Poetry Reading**

**Junichi KOIZUMI**

Inter-departmental Educational Center, Nihon Fukushi University

**Keywords** : フルエンシー, プロソディ, ポエトリー・リーディング  
Fluency, Prosody, Poetry Reading

Abstract

Facing the students' low performance of voicing English, I'd like to say they are the refugees of English education in Japan. It seems something crucial for English education has been missing. In this paper I make a hypothesis that English education in Japan has neglected the efficacy of the aural aspects of English. In other words it doesn't have the scheme that a student may learn to speak English naturally. The way American children learn English will give us a clue for it. We have two key words for it: fluency and prosody. They can speak English naturally listening to a mother and a father but without proper reading education such as prosody they cannot read aloud English fluently.

This paper consists of three sections. At first the previous researches of fluency and prosody in Japan are overviewed. Next is how English native children learn English. From listening and speaking to reading and writing English gets harder for them to learn. They need to train reading by acquiring fluency and prosody. Reciting a rhymed verse or performing poetry reading have been said to be effective for a child to read aloud fluently. Finally it's helpful to look at the situation of primary education in America described in a text book on primary education in which an author emphasized the importance of fluency and prosody. What we need in voicing out naturally are to understand the aspect of a body when we speak aloud and to acquire the competence of it. A poet is a master who can command a word with fluency and prosody. In that sense practicing poetry recitation is very effective to get the reading power.

## 初めに

英語を身につける必要性が唱えられてきているが、大学に入学してくる学生達の英語力が上がらず、特に音声面において日本語英語から脱していない状況を見ていると、彼らが日本の英語教育の犠牲者なのではないかと思わざるを得ない。学生達の学び方や教員の教え方が間違っているのではないかと、根本的に欠落している何かがあるのではないかと。それは音声言語として英語を習得する仕組みが不十分だからという仮説を立て、どのようにすればその仕組みを教育に組み込むことができるのかを英語圏の子ども達が詩の暗唱をどのように行い、それがどのようにアメリカの初等教育の中に取り入れているのかを通して考えたい。英語力を身につけるには、英語母国語話者が言葉を覚えるのと同じプロセスを手がかりにできるのではないかと、詩人が作る作品の言葉にその手がかりがあるのではないかと仮説を立てている。その際、キーワードとなるのはフルエンシーとプロソディなのだが、日本におけるその解釈とアメリカの初等教育現場でどのように教えられているのかも明らかにしたい。この点で考えるべきは、英語の読解力とは英文を音声として認識し、内容を理解しつつ自分でも自然な発声をするということと関係している。全体の構成を述べておく。まず国内におけるプロソディとフルエンシーに関する先行研究をまとめておく。その後、英語を母国語とする子ども達がどのようなプロセスを経て英語を学ぶのか、その際話し言葉から書き言葉にどのように移行していくのか、ネイティブにとっての英語の難しさ、フルエンシーやプロソディをどのように学ばせているのか、それらを身につける上でポエトリー・リーディングの有効性という流れで説明を行う。最後に、アメリカでも子どもたちの言葉の教育は課題となっている。そこで読解力をつける上でフルエンシーとプロソディに着目している研究者の考えを彼のテキストから探り、その接点にあるのが詩の暗唱であることを示したい。自然に英語を音声化することとは何を意味するのか、言葉が持つ身体に由来する要素とは何なのかを理解し、それを使いこなす力を習得しなくてはならない。その点で、詩人とはそうした力を持つ達人たちなのだという認識が英語圏では常識となっているのではないだろうか。その点でも、詩の暗唱が英語の学びで果たす力は大きいと考えていいだろう。

## フルエンシーとプロソディとは

フルエンシーとは日本語にすれば流暢さであり、英語でも日本語でも「流暢に話す」はよく聞く表現だが、個人の力量に委ねられる場合が多く、それを計量化して図ることは難しいため、その力をつける具体的な仕掛けは多くは見られない。プロソディに関しては、英詩の分析では「韻律学」として知られているが、英米の英語教育においてそれとは異なる意味で使われていることはあまり知られてはいない。それらの重要性を訴える研究者は日本でも増えつつある。またネットで検索すると同じ視点からプロソディの有効性を強調するサイトは散見できる。しかし、文科省の指導要領や学校教育におけるキーワードとしては使われていない。フルエンシーとプロソディに対する認識が指導要領に欠落していることをこの研究の出発点とする。

文科省が「英語が使える日本人」の育成を打ち出して以来、それに対する反対意見が大きくなるとなってきたことは言うまでもないが、同時にそれが英語を教える側にも、学ぶ側にも多くの不安を感じさせ、どこに向かえばいいのか方向性を見失わせてきたことの罪は大きい。大局的に見て文科省の主張は正しいとしても、詳細に考察すれば現実的に不可能であったり、具体的な対策が考察されていなかったり、日本人の誰もが英語を使えるようにはならなくてはならないという仮説の設定が間違っているとも言える。例えば英語の知識があることと英語の運用能力があることは別物であり、文科省はただ学力があるのみではなく、実際に英語を使える運用能力がある日本人を増やすことを狙いとしたわけだが、日本人みんなが英語の運用能力をつける必要はないし、どんな分野でも苦手な人やそもそもコミュニケーションを取ることが苦手な人もいる。話し下手な人に話し上手になれという主張は正しいかもしれないが、話し下手なりに他者とコミュニケーションの道を探る方が健全なのではないか。英語が苦手な人にはそれを補う翻訳ソフトなどの情報機器の使い方を教える方が健全なのではないか。みんなが同じように英語ができたり、運用能力がつくはずはないのだ。また英語を学ぶ目的の一つは、母語とは異なる「異質な世界」があることを知ることであり、それを知ることで「世界が広が」ったり、「多角的な視野を持てる」ことにある（鳥飼・斉藤 658）のだから、学生の力量に応じてこの目標が達成できれば英語を学ぶ意義はあるのだ。つまり英語を学ぶ目的を運用能力の向

上に狭めたため、多面的に英語教育を育む視座を見失うことになったのではないか。日本語でも英語でも口頭でのコミュニケーションが苦手な学生も少なくない。そもそも言語能力に向いていない、コミュニケーション能力の低い学生も中にはいるだろう。一方教え方によっては英語力やその運用能力が向上できる学生もいる。英語の音の学び方に関しては、学生の力を向上できる方法があり、それは試してみる価値はある。それを行わないことは教育者としての怠慢であり、教員として学生に対する責任を果たさなくてはならないと考える。そのような視点から英語を声にする指導をどのように行えばいいのかを考察したい。

ここではフルエンシーとプロソディについて日本においてどのように定義されているかを確認する。フルエンシーは先にも述べたように「流暢」さを意味している。書かれている言葉を「正確に」、「容易に」、「明瞭に」話したり、書く能力を意味している。日本語と英語では話し言葉の流暢さの理解には違いがある。コンテキストに依存する度合いが高い日本語と比べて、英語はコンテキストに依存する度合いは低く、日本語より丁寧に語る必要がある分、どのように効果的に、流暢に語れるかは重要なポイントになる。何を語るか同様、いかに語るかが重視されているから、雄弁術やプレゼンのトレーニングが英語では重要視されているのも理解できる。どのようにフルエンシーを身につけるかと言うなら、数多く話し、書くことで言葉を内面化し、自然に言葉が出てくるようにすることだろう。外にある言葉をどれだけ自己の内面に取り込めるのか、言葉と自分が一体化できるのかということだ。プロソディについてはアメリカの心理学協会のサイトから引用してみる。

Prosody — the rhythm, stress, and intonation of speech — provides important information beyond a sentence's literal word meaning. For example, prosody provides clues about attitude or affective state: The sentence "Yeah, that was a great movie," can mean that the speaker liked the movie or the exact opposite, depending on the speaker's intonation.

Prosody is also used to provide semantic information. For example, speakers spontaneously raise the pitch of their voice when

describing an upward motion.<sup>1)</sup>

プロソディとは語のリズム、強勢、イントネーションであり、文で使われている語の辞書的な意味を超え、重要な情報を与えるものである。用例として「そう、あれはすごい映画だったね」という文章を言葉にすると、話し手の選ぶイントネーションによって、彼がその映画が本当に好きなのか、その反対に、皮肉的に話しているのかを示しうる。またそれは意味情報も含んでいる。気持ちが高まってくる時には声のピッチを自然にあげる。このようにプロソディには感情が強く関係している。英語の音声学的分析にとどまるのではなく、談話分析的な視点を含め、メタ言語的な視点から生まれてくる意味までプロソディは関係している。狭い言語活動の枠を超えているため、言葉の背後にある感情を理解しないと、プロソディを捉えることは難しい。これについても後半でアメリカの教育学者のテキストの中で、プロソディがどのように説明されているかを分析する。

プロソディについてネットなどでどのように説明されているのかをまとめておくと、リズム、ストレス、イントネーションなどをまとめた「英語の音の流れの音楽的な要素全て」であり、「歌におけるメロディのようなもの」<sup>2)</sup>のように説明されている。英語をうまく、きれいに発音できる人たちの英語の話し方をイメージすればいい。強弱が明確で、余分な母音を落とし、音の脱落などの英語独特の音の変化をつけ、全体的にメロディアスな話し方のことだ。音感の良い人の方がプロソディの力はつきやすいと思える。プロソディとは何かを頭で理解した上で、具体的にどのように練習をすれば良いのかを考え、感情をどうすれば表現できるのか実践すれば良い。実際にうまく英語を発音できる日本人もいるし、ネットなどではプロソディについて語られている動画もあるのだが、日本の英語教育の中では力点が置かれていない。英語の音に苦手意識を持つ教員には教えるににくいという事情も理解できるが、プロソディを教えず、英語を音声化する仕掛けや仕組みがそもそも存在しない点に問題があるのではないだろうか。具体的な方法については、英語母語話者向けのテキストでそれがどのように説明されているのかも含め後半で述べることにする。

## 日本における先行研究

英語教育や音声学の研究者達によってもプロソディに

についての論文は書かれている。英語を身につけるには教えるべきテーマであると考えられてはいるが、英語教育のカリキュラムの中で取り上げるに至っていない現状を踏まえると、英語教育の中でもその重要性は共通理解とはなっていない。さらに、どのようにプロソディを身につけるか具体的で効果的な方法は示されていない。学習者が好奇心を持ち、楽しみながら学ぶという点では、英語の歌の歌唱、英語の詩の暗唱を通じて、プロソディを身に付けさせるのが適切だと思われる。

英語の音声表現の研究は単音の分析を対象とする音声学がこれまでもあったが、文法学習や英語を日本語に翻訳して理解する訳読だけでは英語学習は不十分であり、よりコミュニケーションに傾斜した音声中心的な学びが必要だと考えられるようになるにつれ、英語の音声表現の重要性に力点が置かれるようになってきている。20世紀後半までの日本での英語教育ではもっぱら訳読や文法学習が中心であったが、それ以降コミュニケーションにも力点が置かれ、音声表現の重要性が指摘されてきている。同時に日本の英語教育の中でどのように音声表現を教えれば良いのか模索が開始された。例えば2005年の『英語教育』12月号の「発音・音声指導に自信を持つ」と「もっとプロソディを」という論文を寄せている。学生の英語発音が不自然であることを嘆きつつ、日本人とハンガリー人のピアノの先生に学んだ経験を基に、日本人は一音一音を大切にすることに対し、ハンガリー人の先生は曲のイメージを大切にすることをしてくれただけから、英語教育にも同じことが当てはまるのではないかと示唆している。結論的にはプロソディの指導は重要なのだが、イントネーション・パターンの実態そのものが科学的にまだあまり解明されていない(野中21)と指摘している。21世紀初頭からプロソディに着目する学者が存在し、その指導方法の模索が始まっている。

同年長瀬もプロソディを教育の中で取り上げる必要を訴えている。論文の冒頭で、プロソディが「学校教育法に於いてほとんど教えられてきていないようである」(124)と指摘し、指導要領では「強勢、イントネーション、区切りなど、基本的な英語の音声の特徴をとらえ」と書かれているが、それ以上の説明がない(124)と述べ、指導要領ではアリのバイ的に音の重要性が述べられているが、指導する教員の立場に立つと、責任を丸投げされ、途方にくれている姿が浮かんでくる。結果英語の音

に対する学生の理解の実態を以下のようにまとめている。

中学校及び高等学校の指導要領で規定されている英語のプロソディについての記述は、内容にとぼしく、体系的というにはほど遠いものである。6年間の英語教育を受けて大学に入学してくる学生たちの英語のプロソディについての知識もほとんど皆無と  
いってよい。(125)

この論文が書かれた年から十数年経過したが、大多数の学生に関して現状も変わりはないと思える。英語を苦手とする学生が存在するのは、本人の努力不足ではなく、不適切な英語のカリキュラムにその原因があり、学生はその犠牲者なのだと考えるべきではないだろうか。以下長瀬の論文では、アクセント、リズム、イントネーションの順番でプロソディについて考察を行っている。

その後プロソディについての研究は徐々に進展してきている。金子は「感情を比較分析するための客観的な方法がないように思われるため、感情表現はどの分野においても体系的な研究が進んでいません」(金子11)ととらえた上で、「日本人英語学習者による感情的プロソディおよび感情表現に着目し」た論文をまとめている。プロソディの習得を目的とするものではなく、「愛情」と「哀悼」の二つの感情に限定し、日本人が声にする英語とそれが英語母語話者にはどのように聞こえるのかという実験の結果をまとめている。実験の結果、日本人英語学習者は「ピッチの高低差と持続時間の不足部分を強度で補おうとしていること」、また「女性の方が男性よりも感情的プロソディ、つまり音声による感情表現が豊かである」ことなどを明らかにしている。日本人が英語を声にする上でのプロソディ研究の裾野が広がっていることを示す研究である。

後藤は聞き手の側がプロソディ情報をどう把握し、それが英文の内容理解にどのような影響を及ぼすのかという視点から分析を行なっている。「音声言語の処理において、プロソディがどのように手がかりとして働くのかを明らかにすることは、指導方法の提案や、言語獲得のプロセスを示すためにも意義がある」(後藤15)と前提を立てている。考察では、「英語の習熟度が高い学習者ほど、プロソディ情報を手がかりとしたN文とV文の判別が正確になる」(後藤20)と述べ、同一の単語が名詞として使われているN文と動詞として使われているV



文の判読に関し、英語力の高い学生の方が、プロソディから得られる情報を活用できることを明らかにしている。

山本・里井は小学校の教員が発音に不安を感じていることを前提とし、プロソディの指導がどのような効果を持つのかをいくつかの小学校での教育実践の結果からまとめている。音声学的な音の要素を分割してアプローチするのではなく、文全体に着目する点にプロソディの特性を求めている。

中学校・高校における発音指導は、これまで分節音（母音や子音）に関心が払われてきたが、近年、プロソディ指導における実証研究が進み、むしろプロソディに重点を置いた指導に効果があることが指摘されるようになってきた。プロソディとは英語らしさに関わる重要な要素であり、分節音より大きな単位であるアクセント、リズム、イントネーションなどが挙げられる。分節音に加えてそれらの韻律的要素を習得することで、英語母語話者に対する判明度は著しく向上する。（山本・里井 12）

音の要素を分断化して理解するのではなく、むしろ英文全体を統合して理解し、発声する点に着目をしている。プロソディに基づいて英語を声にすることで、英語母語話者に理解してもらいやすい英語を話すことができることも前提になっている。この視点から小学生への英語指導をどう行えばいいのかを以下考察している。日本語の発音が高低アクセントであることを示した上で、英語の強勢アクセントとの比較を明示的に行わせること、その際身体活動を伴って音声化しプロソディを体得させると、その身体感覚が体の中に残り、自分一人でも元の音を再現できるのではないかと、またローマ字と英語が別物だとわからせる必要があるなど、実践から得られた知見が多く見られる。（山本・里井 17）

最後に取り上げる大和はプロソディを実際の中学・高校の授業でどのように取り入れればいいのか、その方法を提案している。「プロソディ指導における3つの原則」をまとめ、それに基づいた授業実践から得られた知見をまとめている。これまでの先行研究にも見られたが、個別音やプロソディの各要素をバラバラに説明する弊害を主張し、「プロソディの各要素を一連のものとして（interrelated systemとして）捉える必要がある」と述べている。その上でプロソディ指導の3原則として、

母音のあるところに拍がくること、拍が2つ以上になれば、強弱をつけること、強い拍が複数になれば、そのうちの1つを目立たせることを目安として示している。（大和 221-2）実際の授業で英語の音のどのような点に留意し指導をする必要があるのかを示している点では教育実践において有効な提言であると思われる。さらに「英語プロソディ指導のミニマルエッセンシャルズ：「3つの原則」の開発プロセス」において具体的にどのような形で中高の授業に取り入れるべきなのかが考察されている。（磯田・大和 1-11）

日本の英語教育におけるプロソディ研究は、21世紀に入りコミュニケーションを中心とした英語教育へと舵がきられ、取り組まれるようになってきた。その学問的な裾野は実際の教育においてどのようにそれを教えればいいのか、さらに文化的な視点からも分析の対象となってきている。こうした研究から得られた知見はまだ萌芽状態であり、今後、理論的にも日本語と英語の音韻の特性の違いや、具体的にトレーニングをする方法なども検討する必要がある。実際の教育現場、小学校や中学校でプロソディをどのように教え、身につけさせるのかは喫緊の課題であり、より実践的な視点が求められている。次の章からはこのような視点に応えるべく、英語圏の子どもたちがどのように英語を身につけていくのかを考察する。

### 英語圏の子ども達の言葉の学び

言葉の学びは話し言葉の段階と書き言葉の段階では明らかな違いがある。話し言葉は親や先生などの周りの大人が使う話し言葉を聞き取ってコピーし、それを自分でも口にできるようになればよい。もっぱら音声中心に言葉の理解は行われる。次の段階では、日本語であればひらがな、英語であればABCの学習が行われる。ひらがなだけに限れば、ひらがなを覚えれば日本語は全て読むことが可能だ。一方英語については、綴り字と発音が一対一で対応せず、複数の発音が可能なので、英語の方が書き言葉に関しては学びに難しさがある。

動画サイトのおかげで子ども達がどのように英語を身につけていくのかを見ることができるようになってきた。親が「ピーカブー」と言うのに合わせていないないばーをする姿を見れば、幼児がどのように言葉を使うようになるかが理解できる。また指遊びの歌「This little pig went to market」を声にしながらか親が赤ん坊の

足の指を使ってコミュニケーションを取り、やがて成長した子どもが自分の弟や妹と同じように遊ぶ姿を見ると、口伝えで伝承されるという言葉の昔からの伝統を確認できる。同じように「きらきら星」のようなマザーグースの歌は世界中で共有財産となっている。このような話し言葉の時代に求められるのは、耳で聞いて理解し、聞こえてくる音をコピーする力だろう。歌にはメロディや強弱があるので、プロソディの点でも身につけやすい。

幼児は歌からだけでなく、絵本からも言葉に触れるが、こちらは書き言葉の世界につながっていく。プロソディに至る前提として英語の書き言葉を子ども達がどのようなプロセスで学んでいるのかをまとめておく。ABCの歌を覚えても英語が読めるようにはならず、その代わりによりアルファベットの発音に近いフォニックスを使った教材や動画でアルファベットを子ども達は学び始める。例外はあるが、原則的な綴り字と発音の関係がフォニックスで理解できる。しかし英語の発音は、多くの外国語の影響を受け、例外が多く見られる。例えばサイレント E は単語の語尾に“e”がつくと、それ自体は発音はされないが、語尾の前にある母音の発音を単母音から長母音や二重母音に変えるというほとんど例外ない発音原則である。フォニックスの次に子ども達が学ぶのはこの原則であり、ネット上にもその動画は多く見られ、楽しんで学べるよう工夫されている。三つ目のカテゴリーとしてはサイトワードをあげることができる。サイトワードには“Dolch”と“Fry”の二種類があり、就学前から小学校三年生までを五段階に分け、各学年で学ぶ必要があり、丸暗記すべき言葉、全部で二百程度の単語がサイトワードと呼ばれている。例えば就学前に学ぶサイトワードの中には、“come”や“one”が含まれているのだが、これらはサイレント E の原則の例外になるので、理屈で考える以前に発音を丸暗記で覚えるしかない単語なのだ。サイトワードの中にはフォニックスやサイレント E に該当する語も含まれているのだが、使われる頻度が高く、見たら自然に正しく発音できる必要のある言葉なのだと思う。これら三つのカテゴリーの語彙群をマスターすれば、単語レベルでは発音ができるようになるが、フルエンシーやプロソディはその次に登場する。

アメリカの英語のクラス、つまり日本人にとっての国語のクラスで活用されていると聞くのは“Show and

Tell”と“Poetry Reading”の二つがある。前者は自分の家族や好きなことなどをテーマにしてのスピーチであり、人前で自然に話す力を養うもの。後者は学生が自分で選んだ詩を教室や講堂で暗唱するものであり、フルエンシーやプロソディの力を競うものである。小学生から大学生に至るまで、さらには大人達も詩の朗読を楽しんでいるのは、動画の投稿サイトで検索すれば了解できる。日本の国語教育が内容の読解に重きを置いてきたのとは異なり、アメリカでの英語教育ではどのように英語を声にするのかを修辞学やパブリック・スピーキングの視点からも考え、生徒の英語力を向上させようとしてきた。日本の国語教育では読解に比重を置いてきたことと比べて、英語教育では話し、聞く力にも多くの比重が置かれている。その意味ではうまく書かれた詩を暗唱すると、脚韻などの響きや言葉の心地よいリズムを感じることができて、プロソディの感覚を養うことができる。歌のように覚えやすいもの、イメージがはっきりとして、数行で書かれた作品であれば、学生達は楽しみながら暗唱することができる。<sup>3)</sup>もっとも暗記することは目的ではないので、長めの作品であっても活字を目で追いながらそれを自然に声にできて、内容を理解できるようになることが望ましい。日本語同様英語でも音読の重要性は侮ることができない。

ネット上ではポエトリー・リーディングをうまく行っている動画を見ることもできるが、問題はどのようにしてそのように暗唱する力をつけてきたのかにある。話し言葉の学びから、書き言葉の学びへと進む段階で、英語には日本語の場合とは異なる学びの難しさがある。英語の場合アルファベットの発音が特定の発音に限定されず、発音のヴァリエーションがあるため、文字を見て発音する上で困難がある。日本語の場合、ひらがな、カタカナであれば、文字表記と発音は一对一で対応するが、漢字の場合、「生む」、「生きる」、「生い立ち」、「芝生」、「生ビール」など発音のヴァリエーションは多く、言葉によって、学びの難しさが異なると言えるだろう。英語での難読症の理由の一つは、アルファベットの発音が単語によって変わることにあると指摘されている。日本の英語教育においても、これは注意すべき視点であるだろう。特別な指導を行わなければ、アルファベットの文字を読めるようになることは困難なのだ。どのようにすれば子ども達は活字の英語を読めるようになるのだろうか。小学校の教員が子ども達に音読を指導する上で用い

る方法は、日本語ではコーラス・リーディングと呼ばれているコーラル・リーディングとエコー・リーディングの二つだ。これらもインターネット上で教員が指導する姿を見ることができる。絵本を使い、教師とまだ英語の文字が読めない低学年の生徒、あるいは母親も交え、まず教員が文字を指で追いながらモデルとして音読をし、それに合わせて子どももたどたどしく活字を読み上げる。初期の音読で使われている言葉の多くはフォニックスやサイト・ワードで教えられる言葉だろうから、綴りと発音の対応関係が理解できれば、たどたどしいなりに英語を音にすることはできるようになるだろう。正しいプロソディが理解できるにつれ、生徒だけで声を合わせて読み上げるコーラル・リーディングの出来も上がってくる。それと並行して行われるエコー・リーディングは、日本でも教員が一行一行モデルリーディングを行い、それに合わせて各行を生徒達が声にするというものだ。

エコー・リーディングについては教員と生徒間で行う以外の取り入れ方もある。アフリカ系アメリカ人の子ども達をエンパワーするために書かれた“Hey, Black Child”を使ったエコー・リーディングの動画を例に使いたい。作者はウセニ・ユージン・パーキンス, Useni Eugene Perkins (1932-), 絵本にもなっているし、子ども達が身体を使って声にする動画も多い。下に引用したのは、その一つ目の節である。

Hey Black Child

Do you know who you are

Who you really are

Do you know you can be

What you want to be

If you try to be

What you can be. (Perkins 1-4)

以下同じような形式で三節が続き、アフリカ系アメリカ人の子ども達に勇気を与えるような内容なので、ポエトリー・リーディングには人気がある作品なのだ。動画の中には三歳くらいの女兒が一人で暗唱するものもある。文字を読めるようになる前の幼児の中には、歌を歌うように長い文章を暗唱できる力を持つ子どもがいるからだろう。小学生のクラスのエコー・リーディングで、一人の生徒が上の一行一行を声にし、それに合わせて他の子ども達はその行を繰り返すというパターンで行って

いるものもある。<sup>4)</sup>英語を声にするのが得意な子ども達を何人か選び、その子ども達がリード役として英語を声にし、他の子ども達は身振りをつけながら作品を声にしている動画もある。役割を分担し、身振りもつけることで、生徒たちみんなが言葉の強弱の感じをうまく出せている。クラスでリーディングを行う場合にも、このような工夫は応用できるだろう。

この作品を使った動画をもう一つ紹介したい。アフリカ系アメリカ人の女子に力を与えるために作られたもので、オバマ元大統領夫人が冒頭に登場し「この地球上にいる女の子達みんなに私が受けたのと同じチャンスを持って欲しい」と語り、話が終わると、十人ほどのアフリカ系アメリカ人の四年生のレディ達が場面ごとに切り替わり現れ、見ている人を意識し、ジェスチャーをつけながら上の詩を声にしていく。<sup>5)</sup>最後には“Hey Black Girl”という声が追加され、この動画が特にアフリカ系アメリカ人の女の子も達を意識したものであることがわかる。このような動画作りも、日本の英語教育の参考になるだろう。英語を発話する力を向上することを目的とし、その成果を動画としてまとめれば、生徒達も自分に英語を声にする力があることを感じるができるだろう。一つの枠に子ども達の個性を押し込めるのではなく、彼らの力をどのように引き出し、英語を発声する上で自信を持たせることができるのか、参考にすることができる動画なのだ。

もう一つ紹介しておきたい動画はアフリカ系アメリカ女性詩人のマヤ・アンジェロウ, Maya Angelo (1928-2014) の作品を動画にしたものだ。女優として活動した後、キング牧師とも公民権運動に参加し、その後作家としても認められ、クリントン大統領の就任式でお祝いの詩を朗読もしたアンジェロウは自分の作品を朗読することを好み、“Life Doesn't Frighten Me”は“Hey, Black Child”と同じく、アフリカ系アメリカ人の子ども達を励ますために書かれた作品だが、1996年には、画家のバスキアの作品を使った絵本にもなり、自分でも朗読をしている。<sup>6)</sup>詩人本人の朗読は、本人がどのように自作を理解しているのかがわかるので、興味深いものが多い。同様に、読者がそれをどう理解したのか、内容を理解しているのかを知る上でも詩の朗読の動画から学ぶものは多い。その点でアンジェロウのもう一つ別の作品“Phenomenal Woman”は、大人の女性達に好意的に受け止められている。この作品は白人の視点から見れば



美の基準から外れるアフリカ系アメリカ人の女性が自分のことをどれほど魅力にあふれた、「フェノメナル」(魅力的)な女性であるのかを描いている。営利団体に慈善活動の支援を行っている Omaze はこの作品の T シャツを作り、それを着た色々なナショナリティの女性達を十人ほど登場させ、この作品を朗読する動画を作っている。<sup>7)</sup>聞き手に向けた自然に語りかける姿を見ていると、それを朗読と呼ぶのは躊躇われる。特にアナウンサーによる日本語の朗読は、スクリーンの向こうで静かにしている聞き手に感情を抑えて語りかけるものだが、英語の詩のリーディングは目の前にいる聞き手に感情を込めて語りかけていると思える。ここまで紹介した動画を見れば、フルエンシーとプロソディに基づく英語の詩のリーディングとはどのようなものであるのかが理解できる。

### フルエンシーとプロソディのテキスト

フルエンシーとプロソディの力がつけば、英語を声にすることを楽しめるようになり、英語の詩を声にしてリーディングできることは理解できると思う。では、それは英語母語話者になら誰でも自然にできるようになるのかというと、そうは言えないだろう。2002年ブッシュ大統領時代に策定された「落ちこぼれ防止法 (No Child Left Behind Act)」を例にとれば、アメリカにも教育問題はある。児童の学力向上、教育改善は日本同様問題になっている。ここでは英語教育に限って考察を進めるが、とりわけ読書指導が大きな課題になっている。現場の教員達もそのような法律に直面し、答えを求め、それを支援する書籍が出版されている。日本人はあまり目にすることはないが、例えば Rasinski と Padak の *From Phonics to Fluency*, Rasinski の *The Fluent Reader* と Rasinski, Rupley と Nicholes の共著、*Phonics & Fluency Practice with Poetry* などなど枚挙にいとまがない。ケント大学教授のラシンスキー、Rasinsk は初等・中等教育での英語教育の専門家なのだが、*Phonics & Fluency Practice with Poetry* は詩を中心に据えている点で他の二冊と視点が異なっている。以下本論の論旨に合致する項目をこの文献からまとめることにする。

本書のサブタイトル “Tapping the Power of Rhyming Verse to Improve Students’ Word Recognition, Automaticity, and Prosody---and Help them Become Successful Readers” を訳すと「押韻詩の力を利用し、

生徒の言葉の認識力、自動化、プロソディの力を向上させ、力のある読み手となることを助ける」となり、韻を踏んだ詩を教材として使うこと、文字と文章の処理スピードを上げ、無意識的に言葉を読めるようになるよう自動化すること、プロソディの力を向上させること、その結果読む力をつけることが本書の目的なのだ。逆の視点から見ると、実際の教育ではそれらが行われていないということを意味している。

英語教育をどのように行えばいいのかの議論はアメリカにおいても進行中であり、話し言葉の時期から書き言葉の時期へ移行する際の指導方法、つまりどのように読解力をつければいいのかその方法に關し定説はない。特に本論稿のキーワードであるフルエンシーやプロソディは90年代当時のアメリカの英語教育において軽視されており、本書においてもその重要性を指摘することが目的となっている。その力をつける手段として詩の暗唱をすることで生徒の言葉の力を向上させようとしている。特に90年代から読解力(リーディング)指導が科学的に分析されるようになり、アメリカリーディング委員会(NRP)という組織が、研究結果から、読解をうまく行う上で、以下の五つの要素が有効であると認めている。それは、音素への意識(phonemic awareness)、フォニックスや言葉の解読(phonics or word decoding)、語彙や言葉の意味(vocabulary or word meaning)、読む際のフルエンシー(reading fluency)、最後に内容の理解(comprehension)である。本書ではこの五つを元に、三つのグループにまとめて図で説明している。(Figure 1.) 図で示されているように「表層構造」としては、音素認識とフォニックスによる言葉の認識、それに加えて自動性とプロソディによりフルエンシーとしてまとめられ、「深層構造」は語彙、背景知識、理解するための戦略から成立している。英語を読むプロセスを「表層構造」と「深層構造」に分け、さらに言葉を音で再現するフォニックスや音素の理解、文章の流れの中で英文を自然に音声化する力などの「表層」部分、それに対し、実際に書かれている文章の背後にある語彙や背景にある情報と結びつけて内容理解を促すものを「深層」と捉えている。「表層」とはテキストに書かれている文字に由来するものであり、「深層」とは直接には書かれていない内容を指していると考えていいだろう。英語を読むプロセスを多層的にとらえ、読解に必要な力を分類している点で、日本語の教育にも援用できるだろう。



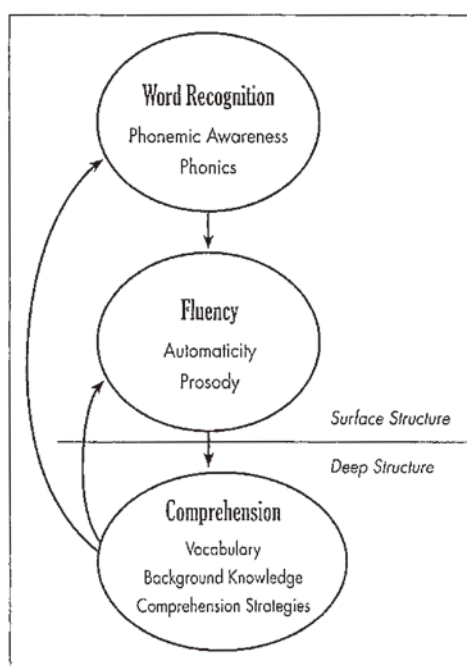


Figure 1. A Simple Model of Reading

読解力が向上しない場合、その原因は単一のものではなく、上に述べた要素が複合的に関係している。学生が英語を学ぶ上で、どの地点で困難を感じているのかを明確化し、それをどのようにすれば乗り越えていけるのかを考える必要があるだろう。「表層」の理解と「深層」の理解の繋がりに関しては、まずフォニックスとフルエンシーは、読解の表層構造を突破するため、活字を解読するために読者が使うべき言語能力（コンペテンス）とされ、音素から単語を正確に理解し、流暢に音声化する力がまず必要なものと考えられている。表層構造は読解を行う上で最も軽視されているものだが、深層構造での読解に大きく関係していることが、以下のように述べられていく。

Deep structure is always what we want our students working toward. But here's the problem: In order for readers to dive deep into meaning, they first have to be able to break through the surface. They need to be able to decode words in the text accurately, automatically, and prosodically. Research has shown that most readers who experienced difficulty with comprehension exhibit some difficulty in one of the surface level tasks –

phonics and / or fluency (Duke, Pressley and Hilden, 2004) . As a result of the difficulties in phonics or fluency, comprehension suffers, and they are unable to dive deep into meaning. (Rasinski 6)

英文の内容を充分理解するためには、表層構造を突破しなくてはならず、そのためには、正確に、自動的に、プロソディに従って言葉を解読する必要がある。内容理解に難しさを感じる生徒の大半はフォニックスやフルエンシーができていないことが研究から明らかになっている。これは日本の英語教育での訳読の限界を示している。日本語に翻訳して英語を理解するのではなく、英語のまま理解しようとするなら、日本語の場合と同じように、声にする順番で直線的に内容理解は進行するのが望ましい。英語を音として正確に再現することが、内容理解に至る道なのだから、英語を音読する重要性は教育においても強調されるべきだろう。単語を正確に発音できること、自然な流れで音にすることができるようになることで、主部や述部、動詞の後の文章構造なども自然にネイティブの場合は身につくと思われる。外国語として英語を学ぶ場合も、全く同じように習得することは困難だが、一つのモデルとして意識すべきではないだろうか。

一般的にフォニックスは「エイ、ビー、シー」ではなく「ア、ブ、ク」と音にすることで、アルファベットの綴りに対応した発音を学ぶものだ。しかし本書ではさらに一歩歩みを広げている。例えば、初見の言葉が出てきた際、フォニックスで発音の基本パターンが頭の中にあれば、一応発音をすることはできる。

Phonics is a reading competency that involves learning to use the sound-symbol relationship embedded in written words in order to produce the oral presentation of words. English is a sound-based language. Letters (e.g., *s, t, a, m, p*) and letter combinations (*at, ate, ight, tion*) represent sounds and combination of sounds. (Rasinski 7)

英語の文字の中には音と記号の関係が埋め込まれている。基本的に日本語の単語は開音節で終わり、ひらがななどの発音が単一であるのと比べ、英語は母音も子音も

ケースバイケースで発音が変わるケースが少なくない。しかし一定のパターンは決まっている。英語母語話者もこのパターンを身につけるには時間を要する。初等教育では特にこうした発音のパターンや癖を身につけさせることは大きな課題となり、仲間言葉とも呼びたくなる“word family”もフルエンシーを学ぶ助けとなる。書き言葉を学び始めたばかりの幼児に言葉が持つパターンを学ばせるのが“word family”であり、そのパターンをより多く覚えることで、初めての言葉に出会っても、発音することが可能になる。

A word family is a fairly common or a frequently occurring combination of letters that have a fairly consistent sound or combination of sounds associated with them and the words are regular, in that they are spelled the way they sound. More specifically, a word family is the combination of letters in a syllable that begins with the sounded vowel and contains any subsequent letters in the syllable. (Rasinski 8)

英文で説明すると難しく聞こえるのだが、ワード・ファミリーとは母音で始まる比較的短めの子音を含む音節で、頭に他の子音が置かれても、後半の音のパターンは変わらない語群を意味する。例えば、“back, tack, sack / stack, crack, black / cracker, blackboard, backpack”のような似た発音の言葉のグループを意味している。初見の言葉と出会った際、すでに知っているワード・ファミリーのパターンに即していれば、その発音を推測することが可能になる。そのようなパターンが存在することを子どもたちが口にしやすい下のような押韻詩にして言わせるのはさらに効果的だろう。

Mr. Zack had a pack on his back. / Mr. Black had a pack on his back. (Rasinski 10)

綴り字と発音の間に関連性があることを理解する以上に、同じワード・ファミリーの言葉が連続することで、音の響きの面白さを子どもたちは楽しむことができるだろう。音読することにより、文字の背後に潜んでいた力が読み手の身体を通して立ち上がる。難しく学ぶのではなく、言葉の持つ面白さや喜びを感じることの重要性も

忘れるべきではない。こうしたワード・ファミリーのポスターはネットでも画像検索できるし、小学校の教室にそれが貼ってあることを想像するのは容易いだろう。イメージ化しやすい単語たちが、抽象的な音の点で共通点を持つことは英語の特性と言えるだろう。ワード・ファミリーで言葉に親しむ結果、言葉はただの記号から、躍動感のある、勢いを持つ言葉、身体を通して感じる力として内面化されることになる。

続いて説明されているのが表層構造の二つ目のカテゴリー、フルエンシー、オートマティシーとプロソディの三つだ。英文を読む上でフルエンシーが意味するものは、正確に読むことだけでなく、フレーズの切れ目を理解すること、文脈の意味（深層構造）を伝える表現の方法を探り、適切なスピードで言葉を音にすることとされている。たどたどしく英文を声にするのではなく、英文を音にすると同時に内容を把握し、文章構造を理解した上でフレーズの切れ目をおさえ、読み取った内容が伝わるように声にすることをあげている。流暢に読むことの中にはこうした項目が含まれている。その上で、フルエンシーは、言葉の認知に関わるオートマティシーと、内容理解に関わるプロソディの二つの要素から構成されている。

オートマティシー（自動化）が意味するのは、テキストを正確に読むだけでなく、苦勞せずに読めること、英文を自動化して読めること、英語を声にしながら内容をイメージしつつ読み取る力のことである。人の注意力や認知力には限界があることとそれは関係している。同時に複数のことを集中して行うことは簡単ではない。文字を読む作業は正に複数の作業を同時に進行することにほかならない。一つは目の前に書かれてある文字を解読すること、二つ目は解読した言葉から意味を読み取ること。英語力が向上すれば、英語を読んだまま、内容を理解することができるようになる。英語の初学習者にとって、それがいかに難しい作業であるかは言うまでもない。このことは英語母語話者にとっても共通する難問なのだ。

If a reader has to use too much cognitive energy to decode the words in a text, even if they are read correctly he or she may not have sufficient cognitive resources available to make meaning or comprehend the passage. As a result, comprehension suffers. (Rasinski 11)

英語を学ぶ際、英文を音読させることは多い。その際、正しい発音で単語が読めない、文の意味を考えずにただ単語を音にするだけ、書いてある単語一つ一つの意味は調べたとしても、それらが一つの文になって何を言おうとしているのかは理解できないケースもある。それは英語母語話者においても同様であり、書かれてある言葉を認知し解読するのに力を使いすぎると、内容を認知し理解するのに必要な情報を得られない場合もあり、結果的に内容を解読できなくなるというのだ。この二つのプロセスを統合するには、読む経験を増やし、読む技量を上げるしかないと思われる。具体的な方法としては、「ワイドな練習」と「ディープな練習」の二つが挙げられている。「ワイドな練習」とは多種多様な文書を読むことであり、「ディープな練習」とは同一の文を繰り返して読むことである。(Rasinski 11-2)

さて最後にプロソディの説明が行われているのは、ここまで述べてきた順番で文の解読と内容理解が行われているからだ。オートマティシーの力がつけば、文の解読が自動化できるようになるので、認知力をあまり使わなくても英文の読解ができるようになり、内容理解に割り当てる余力が増加する。つまり正しい発音で英文を自動的に、無意識的に発音できるようになった時点でプロソディが力を発揮する段階に入る。プロソディについては以下のように説明されている。

Prosody is linguistic term for what we might otherwise call reading orally with appropriate phrasing and expression that reflects and enhances the meaning of the passage. It can be thought of as “reading with feeling.” Certainly, when we think of a person who is a fluent speaker or reader, we think of someone who can convey meaning with voice as well as words. When readers read orally, they speak loudly and softly, speed up and slow down, pause appropriately in the text to indicate phrase boundaries, pause for dramatic effect, emphasize certain words, syllables, and sounds within words, and change the nature of their voices when reading quotes and dialogue between characters. (Rasinski 12-3)

プロソディとは適切な文の切れ目に従い、文の意味をふくらませるような言い方で声に出して読むことであり、「感情を込めて読むこと」である。一般的に日本の英語の授業では、どのように英語を声にして表現するかは教えられていないから、プロソディは日本の英語教育のカリキュラムからは欠落している。流暢に話せる、読めるということは、言葉だけでなく声でも意味を伝えようと意識することなのだ。そもそも日本語においては話し言葉の持つ力、魅力的に話す方法は教育の中で力を注がれているとは言えない。まして、英語教育でそのような力がつくはずはないのだ。プロソディ力のある語り手は、声の大きさや調子を変え、時には空白を作りながら、ある言葉は強調し、引用や対話の場合には声音を変えるなどして、語る事ができるというのだが、繰り返すが、文章を音声にする指導は日本の教育では欠落しているというべきだろう。教えられずとも、感覚的に音感のいい学生もいる。しかしそうではない学生の場合でも、教えられてこなかった英語と日本語の音の違いや、適切なモデルを伝え、強弱を意識させて英語を声にするトレーニングを繰り返せば、メリハリのある英語の発声はできるようになる。

モデルとなる教員にとっても、そうした発声が苦手だというケースは多いだろうが、プロソディの理解に向けた教材として、歌の歌詞、押韻詩が挙げられているので(Rasinski 13)、ネットなどからモデルとなる素材を探して使うか、教員が同じように言葉を音にできるように真似るのが現実的だろう。その上での学び方として、“Modelling expressive meaning”, “Assisted reading” と “Repeated reading” の三つが示されている。(Rasinski 13-4) 一つ目が意味するのは、表現力のある読み方とはどのようなものを生徒に考えさせることである。

Modelling expressive meaning simply means that you need to read texts fluently to your students as they follow along silently. Read with good expression and then talk with your students about how you made meaning with your voice. (Rasinski 13)

教員がモデルとなるような読み方を生徒に示し、どのような点に注意して声にしていたかを生徒と話し合うこ

とで、プロソディの行い方を生徒に理解させることをあげている。この引用の直後には、逆に下手な読み方を行い、その場合に何が原因で文章の理解が阻害されるかを考えさせることも提案されている。これは生徒がプロソディとは何かについてのイメージを形成する段階といえる。プロソディとは経験やトレーニングを通して身につけるものであることがわかる。スポーツの場合と同じで、理屈を理解するだけでは不十分であり、どれだけ練習して、その奥義に至ることができるのかという性質のものなのだと思う。

二つ目のアシスティッド・リーディングとは二人で、あるいはグループでテキストを読み上げる段階であり、プロソディ力の高い生徒がモデルとなる音読を行い、その真似を他の生徒はすればいいので、学生は自分の力量に応じて取り組むことができる。実際に声に出してみる段階だが、教員対他の生徒全員ではなく、学生をグループに分けて取り組ませることで、効果を高めようとしている。先にも述べたが、ネットで見られるポエトリー・リーディングの動画でも、一人の生徒が英文を声にし、その後で他の生徒が一人で、あるいは何名かで同じ文を繰り返し声にするケースや、身振りをつけたり、足を踏んで音を鳴らしたりなど、体の動きと連動させるものなどもある。書かれてある英文の内容を頭だけで理解するだけでなく、身体と連動させ英語を声に出す仕組みが工夫されており、日本の英語教育の中にも取り入れやすい。こうした実践活動は自然にプロソディの感覚を身につけさせる段階といえるだろう。三つ目のリピーティッド・リーディングは上の作業を繰り返すことで、教材を音にするプロソディ力を定着させ、高めるためのものだ。

著者のラシンスキーはアメリカの子供たちが読むことに苦しんでいる理由は、読書プログラムからフルエンシーの教育が除外されてきたからだと考えている。アメリカ政府が2001年から行ってきたリーディング・ファーストという政策の中でフルエンシーを取り入れ始めた学校に関する研究では、フルエンシーに割かれる時間は一日五分程度に過ぎないことが明らかになった。フルエンシーが他の方法より疎かにされていることが問題であり、生徒たちが楽しみながら学ぶことができる押韻詩や歌を教材として使い、フルエンシーやプロソディの力を向上させることができるとラシンスキーは主張している。(Rasinski 14) アメリカの教育におけるプロソディの問題は、日本の国語教育における音読や読解力の

育成とつながるだろう。英語教育の面では、初等・中等教育における英語教育において、読解の問題を黙読、文法理解や訳読に狭めるのではなく、文章を音読することで、文字の意味を読み解き内容を理解し、それをどのように声を通して奏でることができるようになるのかという視座を取り込む必要がある。読者は楽器の演奏家にたとえられる。演奏家が音楽を奏でるように、読者は文章を読み解き、音読をする。演奏家に上手い下手があるように、読者も同様だ。プロソディやフルエンシーの力をつけるというのは、読んだり、音読したりする力を持つ読者を育てるということだ。

ラシンスキーは続いて読解を行う上でなぜ詩や歌、押韻詩を使うべきなのかの説明を行なっている。理由の一つとしてはそれらには韻やリズムなど音の力があることをあげている。歌を歌えるよう、詩を暗唱できるようになるためには、内容を理解するだけでは不十分であり、英文を繰り返し声にして、効果的な言い方を工夫しなくてはならない。そのような練習を通して、プロソディやフルエンシーの力を楽しみながら身につけることができる。(Rasinski 14) 確かに日本人学習者においても、脚韻や頭韻を踏んだ押韻詩やピーター・パイパーのような早口言葉を面白がる学生は少なくない。文法や訳読とは異なる、音から感じる楽しさが英語にあることに新鮮な驚きを持つ学生は少なくない。

日本の英語教育では、かつては文学作品が読解用の教材として使われていた。現在では、英文科を除いて、文学作品が使われることは少なくなってきている。さらに英語で書かれた詩はどうであったかといえば、中学や高校の教科書の裏表紙などの片隅にアリの的に掲載されていたが、授業で取り上げられた記憶がない。一昔前の大学においても小説と比べて、詩を取り上げる教員は少なかった。しかし、詩を専門に学び中高大の教員になった者たちは細々とでも詩を教材に使ってきたと思える。ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、William Carlos Williams (1883-1963) の代表作“*The Red Wheelbarrow*”を学生たちに暗唱させたところ、学生の一人は高校の英語の授業でもこの作品を暗唱したと教えてくれた。このように稀なケースを除き、日本の英語教育でも児童を対象にした英会話学校を除き、英語の詩を教材にすることは昔も今も稀だろう。アメリカでも似たような状況にあるらしい。



At one time in American history, poetry was a cornerstone for reading instruction; in more recent years, it has been replaced by other educational approaches and materials for reading. Even though other genres of reading may be more prevalent in modern-day classrooms, poetry is making resurgence in early reading programs. (Rasinski 15)

詩は教材として使われることが減り、それ以外の散文教材や方法が使われるようになってきているというのだ。しかしながら、もう一度詩の力が見直されつつある時期に入っているとラシンスキーは考えている。マザーグースの歌から英語のリズム感を学び、クラスで詩の暗唱が行われていることから判断すると、アメリカでは以前は詩や韻文が普通に使われていたのだろう。初等教育においては、マザーグースの歌を使って、先に述べたワード・ファミリーを探させることで、文章を素早く、正確に、感情を込めて音にする力をつけることができる。またマザーグースの“Mistress Mary, Quite Contrary”を例として取り上げ、音読することの喜びを指摘している。

Exposing children to the beauty, humor, and vitality of poetic language cannot begin too early and should come about naturally. The words used in poetry, songs, and nursery rhymes are a breath of freshness for language and make reading them and listening to them a pure delight. (Rasinski 21)

散文では感じる事が難しい言葉の美しさ、ユーモア、活力を幼い時期から自然に身につけられるのが詩の魅力なのだ。また言葉を声にし、それを聞く際に感じる喜びも散文と比べて詩の方が伝わりやすく、それを子ども時代のうちに身につけているかいないかはその後の人生に大きな違いを生むだろう。

ラシンスキーはここで、散文と比べて詩の方にこそより強く、深く言葉の力が込められていると述べようとしている。言葉が持つ神秘的な力は詩を通してこそ感じられるものだとわかっているからだ。彼がプロソディやフルエンシーの力をつけることで子どもたちに理解してほ

しいのはそうした言葉が持つ力なのだと思う。そう考えるとラシンスキーが、詩人のロバート・ピンスキー、Robert Pinsky (1940-) の詩の身体性について説明している言葉を引用しているのも納得できる。

The medium of poetry is not words, the medium of a poetry is not lines – it is the motion of air inside the human body, coming out through the chest and the voice box and through the mouth to shape sounds that have meaning. It's bodily. (Hutchinson 19)

翻訳するなら、詩を伝えるものは言葉でも、詩行でもなく、人の体内の空気の動きであり、胸や声帯、口を通り、意味を持つ音を形作る。それは身体に由来する、となるだろうか。詩の言葉が持つ勢いや力を分析する際、それは単語の辞書的な意味を加算した以上のものであり、書き手も読者も言葉の音の重要性をピンスキーは強調したいのだろう。プロソディやフルエンシーも、書き言葉をどのように音にするのかという点で、ピンスキーが述べていることと関係している。ただしこのような言語観は言語によって異なるものであり、英語に当てはまるからといって日本語に当てはまるとは限らない。音声面より、視覚面に依拠する日本語はまた別に考える必要がある。しかし、英語の場合は日本語と比べて、音声に依拠した言葉なのであるから、それに即した教育のあり方を考える必要はある。ラシンスキーはピンスキーの引用の後で、次のように書いている。

The more we can make learning a multisensory experience, the more likely that struggling learners will meet success. The physical nature of poetry, song lyrics, and rhymes taps directly into a multisensory approach to learning. As Emily Dickinson stated, “If I read a book and it makes my whole body so cold no fire can ever warm me, I know that is poetry.” (Rasinski 23)

音声としての言葉は身体から出てくるのだから、書き言葉とは出自の異なる身体と関わりを持つことをラシンスキーも意識している。視覚や聴覚など複数の感覚が発動し、それらを調和させることができれば、英語の学習

はうまく進み、プロソディやフルエンシーの力はつくるだろう。アメリカを代表する女性詩人、エミリー・ディキンソン、Emily Dickinson (1830-1886) からの引用は、彼女が知人の文芸批評家トマス・ヒギンソンに書いた手紙の一部であり、彼女にとって詩とはどのようなものなのかを説明している。「火では温められないくらい身体が冷たいと感じたら、それが詩なのです」とは、頭だけで読むのではなく、五感で読む態度を意味している。この引用の続きでは、「頭のてっぺんがもぎ取られたと身体で感じれば、それが詩なのです。詩かどうか分かる方法がこれです。他にありますか」とディキンソンは問いかけている。言葉の達人である詩人の言葉を引用し、ラシンスキーは子どもたちがプロソディやフルエンシーを身につけ、英語を声に出す極北の地点を示している。子ども時代のピンスキーやディキンソンも、現代の子どもたちと同じように英語を学び、身体感覚を通し、英語を声にする力をつけ、詩人として作品を書けるようになったのだ。

## 終わりに

英語母語話者と第二言語として学ぶ学習者では、英語の学び方に違いは生じるだろう。学ぶ目的によっても学び方は変わる。書かれている内容を理解するだけでよかったのなら、文法と訳読を中心に学習すれば充分だったろう。しかし、コミュニケーションを中心とするなら、英語を聞き取る力、言葉の力を感じとり英語を話す力をつける必要が生じる。これらの力をつけるためには英語母語話者が行ってきたのと同じように、プロソディやフルエンシーを学び、身につけることで、文字と音声がどのような相関関係を持っているのか、内容を表現するにはどのように音声表現をすればいいのかを学び、実践する必要がある。理屈を頭だけで理解するのではなく、スポーツをするように、言葉の運用能力を練習や実践を通して身につけてはならない。この視点から具体的な学びの仕組みを作らなくてはならない。学びの素材として、発音のパターンなどを子どもたちが楽しんで学んできたマザーグースのような押韻詩や脚韻など音の面白さを発揮した詩の暗唱が望ましい。この点で、押韻詩や詩をどのように教材として授業に取り入れればいいのかを考察する必要がある。ほとんどの学生は自分が話す日本語の声を聞いたことはない。まして自分の話す英語を聞いたことがある学生はさらに少ない。ここまで述べたようにプロソディやフルエンシーについて解説する

だけでは不十分であり、学生に英語を声に出させ、それを自分の耳で確認し、さらに英語の声を鍛える必要がある。この点で、パソコンやスマートフォンは大いに活用できる。受身的に英語を学ぶのではなく、自分の身体を通し、いろいろな感覚を言葉が刺激する体験ができれば、英語に対する向き合い方が変わる契機となるだろう。実際にどのような取り組みが可能なのか、どのような手順で仕組みを作ればいいのかについては稿をあらためて論じたいと思う。

## 出典

- 1) <https://www.apa.org/pubs/highlights/peeps/issue-29-2021.9.1> 参照。
- 2) <http://gyakuten-eigo.net/guide/prosody-rhythm-stress-intonation-importance-and-study-tips/> 2021.9.1 参照。
- 3) 私の講義で学生が短時間で暗唱する作品には Shel Silverstein の “Early Bird” や “Lazy Jane” がある。
- 4) [https://www.youtube.com/watch?v=z\\_VasAwFdEU2021.9.1](https://www.youtube.com/watch?v=z_VasAwFdEU2021.9.1) 参照。
- 5) <https://www.youtube.com/watch?v=GfwMukce5-U2021.9.1> 参照。
- 6) [https://www.youtube.com/watch?v=UN4\\_wfm7rjE2021.9.1](https://www.youtube.com/watch?v=UN4_wfm7rjE2021.9.1) 参照。
- 7) <https://www.youtube.com/watch?v=P7c6i-R6gFY2021.9.1> 参照。

## 引用文献

- Angelou. Maya. *Life Doesn't Frighten Me*, Harry N. Abrams, 1996.
- Hutchinson. Rayna. *You / Poet: Learn the Art. Speak Your Truth. Share Your Voice*, Adam Media, 2018.
- 磯田貴道, 大和知史. 「英語プロソディ指導のミニマムエッセンシャルズ: 「三つの原則」の開発プロセスから」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集 15』, 2018.
- 金子育世, 「英語における感情的プロソディと感情表現: 学習者と母語話者との比較」『情報文化論 9』, 2009-10. pp. 11-30.
- 後藤亜希, 「英語学習者の英語リスニングにプロソディ情報が及ぼす影響」『中部地区英語教育学会紀要第 45 巻』, 2016. pp. 15-22.
- 鳥飼玖美子・斉藤孝, 『英語コンプレックス粉碎宣言』, 中公新書ラクレ, 2020.
- 野中泉, 「英語らしく聞こえる発音のコツは?」『英語教育 12』, 2005. p.14.
- . 「もっとプロソディを」『英語教育 12』, 2005. pp.19-21.
- 長瀬慶来, 「英語プロソディの指導と研究」『山梨大学人間科学部紀要 7 (2)』, 2005. pp. 124-141.
- Pinsky. Robert. *The Sounds of Poetry*. Farrar, Straus and Giroux, 2014.

- Rasinski. Timothy V. *The Fluent Reader*. Scholastic, 2010.
- Rasinski. Timothy V., Padak. Nancy D. *From Phonics to Fluency : Effective Teaching of Decoding and Reading Fluency in the Elementary School*. Pearson, 2008.
- Rasinski. Timothy V., Rupley. William H., Nichols. William Dee. *Phonics & Fluency Practice with Poetry*. Scholastics, 2012.
- Perkins, Useni Eugene. *Hey Black Child*. Little, Brown and Company, 2003.
- 山本玲子・里井久輝, 「英語と日本語のプロソディの違いに気づかせる小学生への語アクセント指導の試み: 「相手に伝わる発音」への効果」『関西英語教育学会紀要 40』, 2016.
- 大和知史, 「英語のプロソディ指導における3つの原則」の提案とその理論的基盤, 柳瀬陽介・西原貴之(編著)『言葉で広がる知性と感性の世界: 英語・英語教育の新地平を探る』, 溪水社, 2016. pp. 219-231.

